ナバックレター

母豚管理における抗生剤の適切な使い方

(有)シガスワインクリニック　志賀 明

1.はじめに

近年、国内の養豚は離乳後の事故率の増加による生産性の低下が顕著になり、出荷頭数の減少を招いています。その原因は種々の疾病によるもので、それらの予防対策に苦慮しています。

種々の感染症に対しては多種のワクチンが市販されています。ワクチン接種ですべての感染症がコントロールできればよいのですが、実際はワクチンだけではコントロールできません。当然オールインオールアウトシステムや空き豚房の水洗、消毒等の衛生管理が重要ですが、現場では、種々の疾病の発症が起こっており、また直ぐにその対応に迫られます。通常、発症した豚の治療には抗生剤が使われることが多く、その使い方は獣医師の指示のもとに適正に使わなければならないことは言うまでもありません。

図1（次ページ参照）に生産現場での母豚に見られる症状と病気を示しました。今回、生産現場での種々の母豚の疾病(症状)や母豚の管理場面における抗生剤の適切な使い方について、考えてみました。

2.候補豚馴致における抗生剤の利用　（表1参照）

繁殖豚の更新は年間30～40%程度行われています。更新用の母豚候補豚は衛生レベルの高い種豚場から導入することが大切です。その候補豚は農場の隔離施設に入れて飼育され、約2ヶ月間の馴致を実施します。馴致の方法はさまざまですが、農場の病気にさらされるわけですから、候補豚にとっては過酷な行為です。農場内の疾病の汚染度合いにもよりますが、糞便や病畜との接触等による馴致期間には過度の感染をコントロールし、必要以上の候補豚へのダメージを減じるために、抗生剤を与えます。期間は糞便投与等の週の前後です。抗生剤は飼料添加で与えることが多く、抗生剤の種類は農場内の疾病の種類によって獣医師が判断して選択するべきです。例えば豚赤痢の心配がある農場ではリンコシンやチアムリン等を使用します。特に免疫活性を低下させるような抗生剤の投与は馴致の目的を阻害することになるので選択するべきではありません。

また、糞便等を経口的に与える場合は特に腸内菌叢へのダメージを減らす意味でも生菌製剤と併用することが肝要です。（次号に続く）

表　1　導入豚馴致プログラムの一例

導入日～	月齢	投薬		ワクチネーション	馴致	その他
～7日　～1W	5ヶ月	生菌製剤 ビタミン・ミネラル製剤		AD		導入隔離豚舎へ
～14日　～2W			リンコミックス44　0.25%【5g／頭】	PRRS		
～21日　～3W					＜糞 胎盤投入＞	
～28日　～4W				AD	＜既存豚との接触開始＞	
～35日　～5W	6ヶ月	生菌製剤 ビタミン・ミネラル製剤		PRRS		
～42日　～6W						
～49日　～7W				MPS　＆　App		
～56日　～8W				PPV		
～63日　～9W	7ヶ月	生菌製剤 ビタミン・ミネラル製剤		AR		
～70日　～10W						
～77日　～11W				MPS　＆　App		
～84日　～12W				PPV		交配舎へ
～91日　～13W	8ヶ月	生菌製剤 ビタミン・ミネラル製剤		AR		
～98日　～14W						
～105日　～15W						
～112日　～16W						交配開始
～119日　～17W	9ヶ月	生菌製剤 ビタミン・ミネラル製剤				
～126日　～18W						
～133日　～19W						
～140日　～20W						

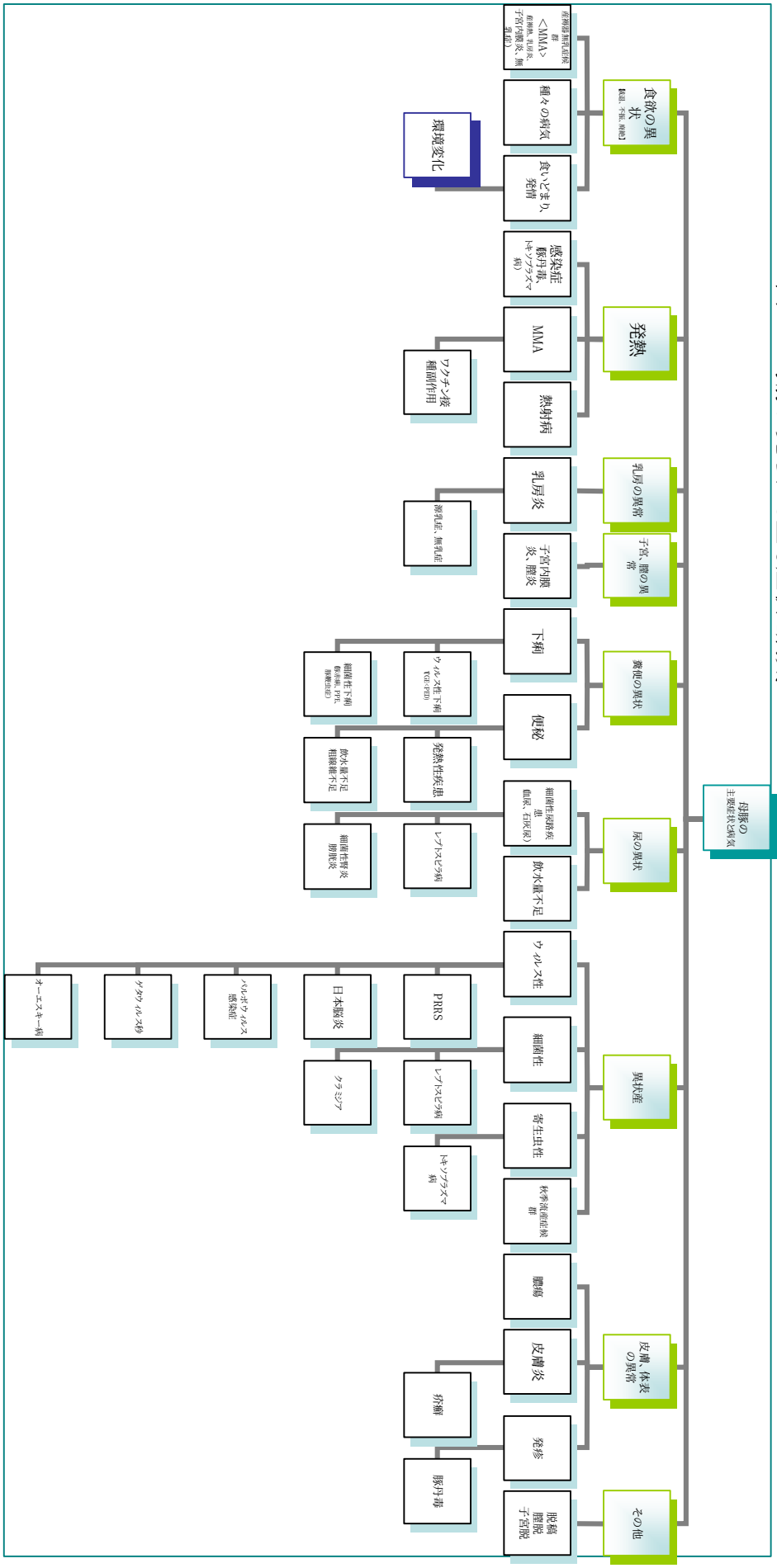

図1　母豚に見られる主な症状と病気